

中国では滅んでしまった。わが国へこの本が確かに将来されたことは藤原佐理撰「日本国見在諸目録」にその名前が見いだされることから分かる。しかしながらその後は行方不明である。京都のどこかに、占いの本や暦学の本に紛れて「綴術」が今も密かに見いだされるのを待っているのではと妄想を逞しくしたくなる。

和算のことを語りすぎて電子図書館のことを

記す余裕がなくなった。電子図書館は画像だけでなくテキストデータを同時に収録すべきと思われる。しかし、和算書の名前一つをとってみても、現在のコンピュータの文字数は少なすぎて記録するのに不十分である。おまけに、外国からは日本語の表示を見ることができない場合が多い。電子図書館を云々する前に技術的に解決しなければならない問題が山積している。

中国古典籍のブックデザイン

人文科学研究所助手 木 島 史 雄

「ブックデザイン」と表題に記しましたが、ここでは装丁や装飾ではなく、主に書物の仕組みや働きという意味でのデザインについてお話いたします。

書物にはいろいろな接し方があります。何も「読む」ためだけのものとは限りません。辞書や電話帳、時刻表などの、「調べる」書物もありますし、内容ではなく、書き写したり、声に出して読んだりすることに価値があるとされる、お経、おふだなどの「拝む書物」もあります。書物について考えるとき、これらの「読まない」書物にも目を向けてみる必要があります。

つぎに中国の文献学の「書」と「本」の区別にも触れておきます。「書」とは、『高野聖』『歌行燈』などの、著作物の種類のことです。それに対し「本」とは、書の現実態としての版やヴァリエーションのことで、自筆原稿本／鏡花全集本などといった区別がそれに当たります。ところでそれぞれの「本」の違いは、その本が当初想定していた使われ方を反映しているということが出来ます。たとえば、携帯に便利な文庫本は、戸外で読むことをも想定しているでしょうし、大きな活字の本は、老眼鏡世代を读者に想定しているというぐあいです。そして同書異本の場合には、＜書＞ではなく＜本＞ごとの、想定されている読書環境が浮かび上がってくる

ことになります。今回は例として、古典の本文と一次注釈の双方を対象として著わされた、六世紀の古典注釈書『經典釈文』を取りあげてみます。

この書物は、中国の南北朝の末に成立したもので、『周易』『尚書』から『莊子』『老子』までの、当時の古典14種につけられた注釈全集です。そしてこの書は、文字の発音を指示することをおして、対象の文章の意味を固定し、解きほぐしてゆきます。「樂」と言う文字に、「ガク」とフリガナが振ってあればオンガクの意味であり、「ラク」とあれば（たとえば「道楽」）タノシミという意味であることがわかるという仕組みです。

さてこの書物には、＜篇章構成＞と＜文字表記＞の二つの点で、大きな特色があります。

篇章構成の特色とはこの書がどのような章立てになっているかということで、つまりはしくみといってよいでしょう。具体的には、以下の二つの篇章を挙げる事ができます。

條例＝これは現在の言葉でいえば「凡例」にあたり、書物編纂のテクニカルな方針と約束事を記した独立した手引きのことです。この條例の存在により、書物は初めて手に取る者にも使いやすいものとなるとともに、各種省略記号の使用が可能になって、重複記述のな

いコンパクトなものになるのです。

注解伝述人＝これは、それぞれの古典と注釈の来歴や著者についてのデータ、学派の盛衰などを記す一種の学術史です。これによって、『經典釈文』中で引用される先行注釈が、時代や学派の流れの中に整理配置され、古典学全体を見渡すことが可能になります。つまり文字ごとに記される個々の注釈を古典学の伝統の中に有機的に総合するものと言うことができます。

つぎに＜文字表記＞の特色に目を向けてみましょう。

摘字注釈＝この書の序に、「舊音は皆な経文の全句を録し、徒らに翰墨を煩す。今は則はち、～字を摘んで音を爲す。」とあります。注釈をつける際に、以前は、対象の古典の文章全部を引用し、その中に注釈を差しはさんでゆくスタイルでした。ですから、一つの古典について、いくつかの注釈を手元にそなえ、比較検討するときなど、古典の本文は幾度も書き写されることになって、無駄な労力を費やしていたのでした。この書では、注釈の対象となった文字だけを掲出することにより、

情報量をたもったままで、文字数を減らすことが可能になりました。

朱墨のつかいわけ＝この書の序に、「今墨をつて經本を書し、朱字もて注を辯じ、用つて相ひ分別し、較然として求む可から使む。」とあります。先にも記したように、この書は二次注釈ですから、分析対象として＜古典の本文＞と、＜一次注釈＞の二つの階層が存在しています。そこで分析対象の文字を示すときに、＜古典の本文＞には墨を、＜一次注釈＞には朱を用いたわけです。この色分けによって、経文と注釈の混淆を避けることができますし、ある文字につけられた『經典釈文』の解釈を知りたいときに、それが経文の文字であれば墨書された文字を辿るだけでよく、注であれば朱文字を辿ればよいということになります。これにより、利用するのに必要なエネルギーが大きく削減できるわけです。この表記法を伝える写本が現存しており、(図)ここでは朱字を使うかわりに文字の頭に朱点が打たれています。

以上から、『經典釈文』の特色として、まず第一に「読む」のではなく、「調べる」のに便利のようにデザインされた書物であることが明かになりました。また個別の注釈を古典学の流れの中へ位置付けようという意向を強く持っていたことも判ってきました。さらに、この書が成立した当時の、古典文献をとりまく環境として以下のことを指摘することもできます。

本文と注釈とが、別々の書であったこと
書物の断章取義的な利用が広まっていたこと
古典学をくくる大きなシステムが求められていたこと

そしてこの『經典釈文』という書は、成立した後も様々なデザイン改変を受けており、その広がりから、時代ごとの利用のされ方を見て取ることが可能ですし、ひいては、古典文献を取り巻く環境の変化を読み取ってゆくこともできるのです。

書物の中身ではなく、器としての性格、つまり「モノとしての書物」に目を向けてみることも、たいへん有用なことなのです。

(きしま ふみお)



フランス国立図書館所蔵
敦煌本「尚書」舜典釋文殘卷(P.3315recto)部分